

第 18 話：戦後の我が国における主要水産缶詰の輸出货量動向

日本水産缶詰輸出水産業組合・日本水産缶詰工業協同組合
専務理事 松浦 勉

「サバ缶詰を食べよう」シリーズでは、第 1 話が「テレビ番組によりサバ缶詰人気上昇」、第 2 話が「消費拡大に伴うサバ缶詰の新商品開発」、第 3 話が「中央水産研究所のサバ缶マニア」、第 4 話が「サバ缶詰を使ったご当地料理」、第 5 話が「レシピ本にみるサバ缶詰料理」、第 6 話が「サバ缶レシピ本の出版動向」、第 7 話が「レシピ本とテレビ番組がきっかけを作ったサバ缶ブーム」、第 8 話が「統計資料からサバ缶ブームをみる」、第 9 話が「サバ缶ブーム下における青物 3 魚種缶詰の販売金額の動向」、第 10 話が「サバ缶の調理方法別消費動向」、第 11 話が「サバ缶ブーム期におけるサバ缶の輸入を含む供給動向」、第 12 話が「マグロ缶ブームとサバ缶ブームの比較」、第 13 話が「小売店舗におけるサバ缶の販売状況」、第 14 話が「ポルトガルの水産缶詰事情」、第 15 話が「八戸市で開催された鯖サミット」、第 16 話が「水産高校とサバ缶詰」、第 17 話が「戦後の我が国における主要水産缶詰の生産量動向」についてお話しさせていただきました。第 18 話は、「戦後の我が国における主要水産缶詰の輸出货量動向」についてです。

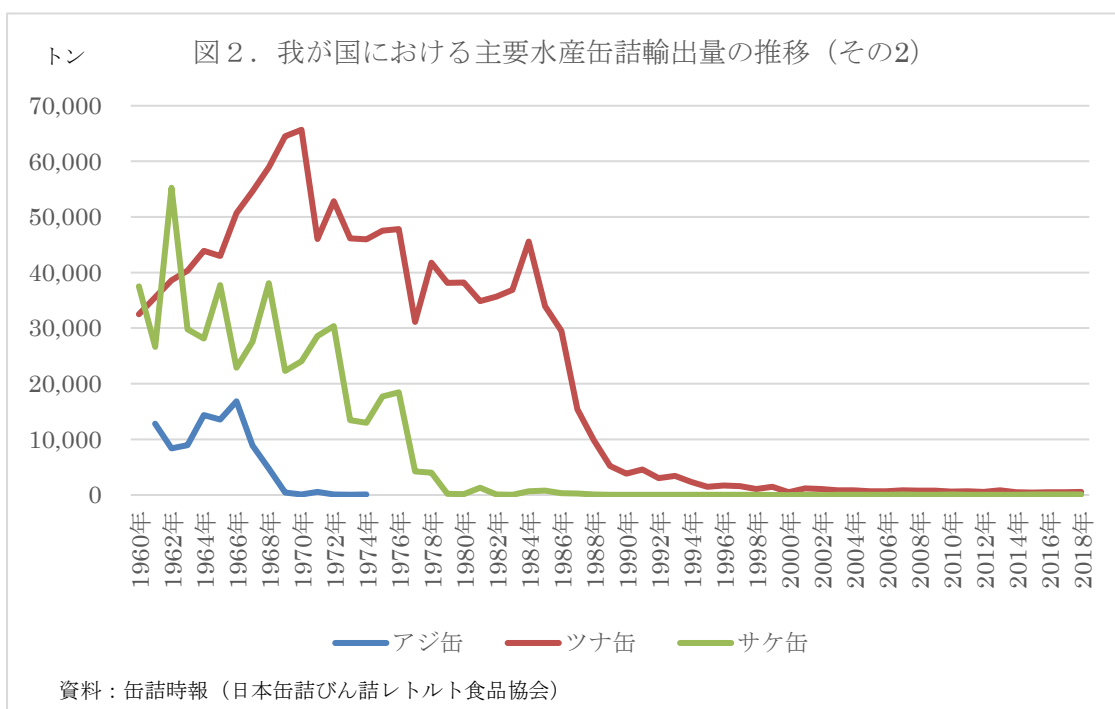
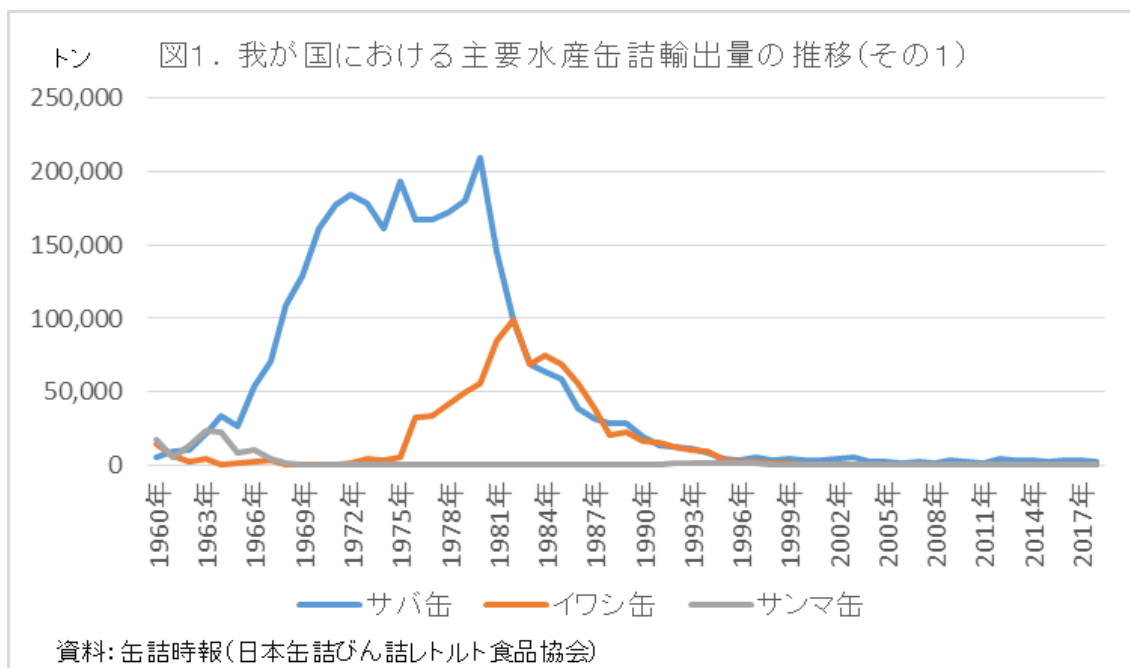
日本の貿易収支が赤字であった 1960 年代前半までの間、水産缶詰は外貨を稼ぐ重要な輸出品でした。1958 年には水産缶詰の輸出金額が、日本全体の輸出金額の 4.2% (44,120 百万円) を占めました。1958 年の水産缶詰別輸出金額をみると、サケ缶 (24,699 百万円) が過半を占め、次いでツナ缶 (マグロとカツオ) (8,376 百万円)、カニ缶 (4,613 百万円)、サンマ缶 (2,299 百万円)、イワシ缶 (1,885 百万円)、サバ缶 (263 百万円)、アワビ缶 (129 百万円) の順でした。

図 1 に「我が国における主要水産缶詰輸出量の推移 (その 1)」、図 2 に「我が国における主要水産缶詰輸出量の推移 (その 2)」を示しました。ここでいう「主要水産缶詰」とは、サバ缶、イワシ缶、サンマ缶、アジ缶、ツナ缶、サケ缶の 6 品目をいいます。なお、第 17 話 (戦後の我が国における主要水産缶詰の生産動向) の主要水産缶詰 (計 7 品目) に含まれていたクジラ缶は、主に国内で消費され、輸出が少ないので除きました。

品目別輸出量の推移をみると、サバ缶の輸出量は、1960 年の 5,243 トンから、1968 年には 10 万トンに増加し、1980 年がピークの 209,946 トンでした。しかし、その後減少し、1982 年以降 10 万トンを下回り、1990 年が 19,100 トンとなり、1996 年以降 1,000 トン～3,000 トンで推移しています。

イワシ缶の輸出量は、1960 年には 14,439 トンでしたが、マイワシの漁獲減により減少し、1969 年には 239 トンに低迷しました。その後マイワシ漁獲量の増加に伴い、1982 年

がピークの 98,599 トンになりましたが、再び漁獲量が減少し、2012 年の輸出量はわずか 8 トンになりました。その後マイワシ漁獲量が再び増加したため、2018 年の輸出量が 104 トンになりました。マイワシは、青物 4 魚種（サバ、マイワシ、サンマ、アジ）の中では最も資源変動が大きく、戦後から現在まで資源が 3 回大変動しています。



サンマ缶の輸出量は、1960年が17,829トンでしたが、1967年以降1万トンを下回るようになりました。サンマ缶はイワシ缶やサバ缶の輸出量が少ない時の代替品目の性格が強く、イワシ缶やサバ缶の輸出量が多かった1984年～1991年には、サンマ缶はほとんど輸出されませんでした。その後、サンマ缶輸出量は、1992年～1997年が1,000トン前後、1998年以降500トン前後で推移しています。

アジ缶の輸出量は、1961年が12,811トンであり、以後1966年までは1万トン前後で推移しました。しかし、その後アジ漁獲量が急減したため、アジ缶からサバ缶への転換が進み、1975年以降の輸出量はゼロになりました。

ツナ缶の輸出量は、1960年が32,503トンであり、1970年がピークの65,675トンになりました。しかし、その後徐々に減少して、1988年には1万トンを下回り、1995年以降1,000トン台以下で推移しています。

サケ缶の輸出量は、1960年が37,512トンであり、1962年がピークの55,244トンでしたが、1963年～1972年には2万～3万トン台で推移しました。しかし、その後日ソ漁業交渉により我が国のサケ漁獲割当量が減少したため、輸出量は1973年～1976年には1万トンで推移しました。また、1977年にはソ連が200海里経済水域を設定したため、サケ缶輸出量は4,000トンに減少、1982年以降数100台以下で推移しています。

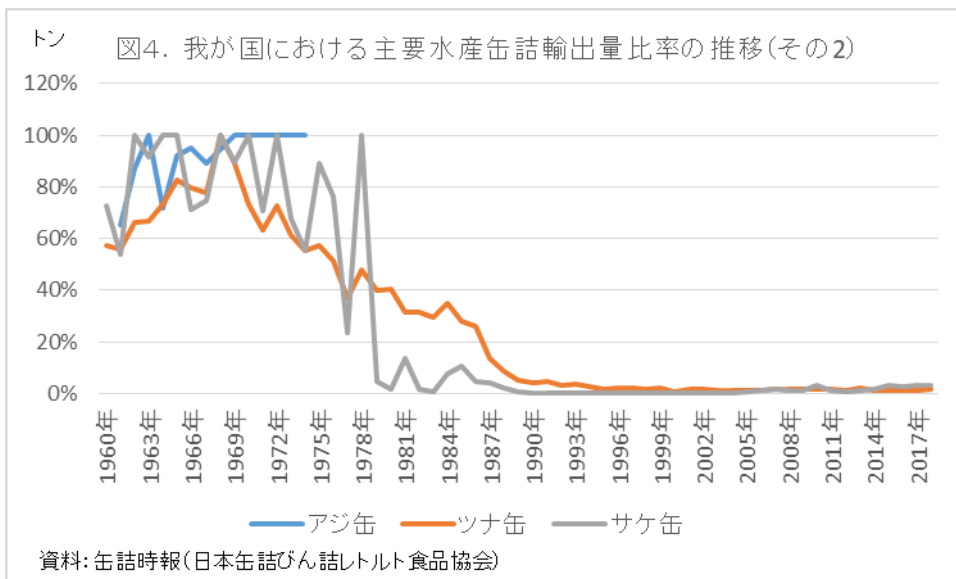
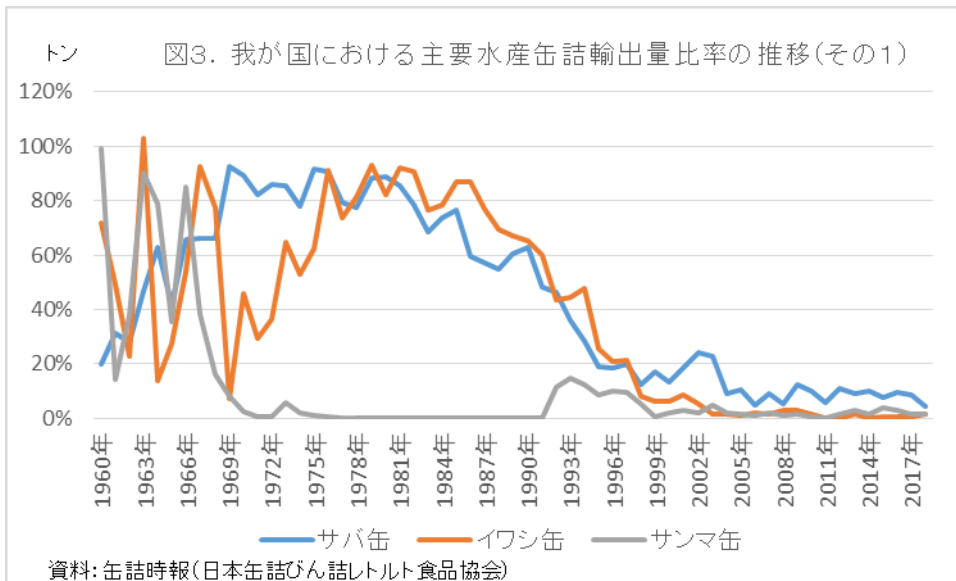
次に、図3に「我が国における主要水産缶詰輸出量比率の推移（その1）」、図4に「我が国における主要水産缶詰輸出量比率の推移（その2）」を示しました。「輸出量比率」とは、同年における品目別缶詰生産量に占める輸出量の比率をいいます。また、時系列的变化として、1960年から2010年まで10年毎と2018年（直近年）における主要水産缶詰の輸出状況を述べます。

①1960年代

1960年のすべての水産缶詰（上記6品目以外も含む）の輸出量（以下、「合計輸出量」）は131,074トンでした。品目別には、サケ缶(37,512トン)、ツナ缶(32,503トン)、サンマ缶(17,829トン)、イワシ缶(14,439トン)、サバ缶(5,243トン)の順に多く輸出されました。

1960年の輸出量比率をみると、サンマ缶が99%、サケ缶が73%、イワシ缶が72%、ツナ缶が57%、サバ缶が20%の順でした。

価格が高いサケ缶、ツナ缶は欧米への輸出量が多く、大衆的価格であるサンマ缶、イワシ缶、サバ缶は、アジアやアフリカへの輸出量が多いです。



②1970年代

1970年の合計輸出量は、269,039 トンに増加しました。品目別には、サバ缶（161,194 トン）、ツナ缶（65,675 トン）、サケ缶（24,018 トン）、イワシ缶（469 トン）、サンマ缶（122 トン）、アジ缶（63 トン）の順に多く輸出されました。サバ、イワシ、サンマ、アジの缶詰を総称して、青物缶詰といいます。

1970年の輸出量比率をみると、サケ缶が100%、サバ缶が89%、ツナ缶が73%、イワシ缶が46%の順でした。

ツナ缶の輸出は、1970年1月に米国のFDA(食品医薬局)によって実施された「水銀含有

量に関する規制」と、その検査に関連した FDA によるデコンポジション（品質不良）を理由とする大量の輸入拒否を受けたことにより、1971 年以降輸出が減少しました。

サバ缶の輸出量は、1961 年、1962 年頃から増加の一途をたどりました。このため、サバ缶の輸出量比率は、1960 年には 20%と低かったのですが、1970 年には 89%に上昇しました。その結果、サバ缶の輸出量は、1971 年にはツナ缶を抜いてトップになりました。

好調であったツナ缶輸出は、1971 年ニクソンショックによる円の変動相場制への移行により陰りが見え始めました。また、1977 年ソ連の 200 海里経済水域設定によるサケ漁獲割当量の激減によって、戦前から戦後を通じて我が国輸出缶詰の中心であったサケ缶は、輸出量が 1976 年の 18,475 トンから 1977 年には 4,207 トンに減少しました。

③1980 年代

1980 年の合計輸出量はピークの 308,098 トンになりました。品目別には、サバ缶 (209,946 トン)、イワシ缶 (55,498 トン)、ツナ缶 (38,210 トン)、サケ缶 (139 トン)、サンマ缶 (14 トン) の順に多く輸出されました。

1980 年の輸出量比率をみると、サバ缶が 89%、イワシ缶が 82%と高く、ツナ缶が 40%に低下しました。他の品目は 5%を下回りました。ツナ缶の輸出量比率は、1972 年までは 71%と高かったのですが、1973 年以降漸減しました。

サバ缶は、1980 年にはサバ漁獲の回復と好調な輸出に支えられて、輸出量がピークに達しました。輸出先は、フィリピンをはじめとする東南アジアや中近東、アフリカなど外貨事情の悪い発展途上国が多いため、不安定な為替相場とあわせ、採算性が低かったようです。

1983 年になると、サバ缶とイワシ缶は、ナイジェリアとフィリピンの輸入規制措置によって輸出できなくなりました。ナイジェリアはサバ缶の最大市場、フィリピンはイワシ缶の最大市場でした。我が国は、同じ年にサバ缶とイワシ缶の二大市場を失ったことにより、青物缶詰の輸出量減少に拍車がかかりました。

前年 (1982 年) と 1983 年の輸出量を比較すると、サバ缶は 99,442 トンから 68,645 トン、イワシ缶は 98,599 トンから 68,661 トンに減少しました。

ツナ缶については、1980 年以降、輸出競合国が台頭してきました。当初の競合国はフィリピンや台湾でしたが、1983 年頃からはタイが急速に国際市場に進出し、瞬く間に世界市場を席卷していきました。

また、1985 年 9 月のプラザ合意による急激な円高は、日本の缶詰の競争力を極度に減殺することになりました。ツナ缶の輸出量は 1984 年の 45,582 トンから 1985 年には 33,933 トン、サバ缶の輸出量は 1984 年の 63,739 トンから 1986 年には 38,599 トン、イワシ缶の輸出量は 1984 年の 74,958 トンから 1986 年には 55,930 トンに、それぞれ減少しました。この結果、水産缶詰全体の生産量に占める合計輸出量の比率は、1984 年には 53%でしたが、1986 年には 44%と過半数を割ってしまいました。

④1990年代

1990年の合計輸出量は43,892トンでした。品目別には、サバ缶(19,100トン)、イワシ缶(17,015トン)、ツナ缶(3,829トン)の順に多く輸出されました。

1990年の輸出量比率をみると、イワシ缶が65%、サバ缶が63%でした。他の品目は5%を下回りました。この2魚種の缶詰だけ輸出量比率が高く、他の缶詰はあまり輸出されなくなりました。1990年のツナ缶の輸出量比率はわずか4%であり、ほとんどが国内消費向けになりました。

⑤2000年代

2000年の合計輸出量は5,743トンであり、1990年の合計輸出量の13%にまで減少しました。品目別には、サバ缶(3,912トン)、イワシ缶(942トン)、ツナ缶(494トン)の順に多く輸出されました。

輸出量比率は、サバ缶が1992年まで40%以上、イワシ缶も1994年まで40%以上でした。しかし、2000年の輸出量比率は、サバ缶が13%、イワシ缶が6%といずれも大幅に低下しました。他の品目は、いずれも5%を下回りました。

⑥2010年代

2010年の合計輸出量は4,057トンでした。品目別には、サバ(2,860トン)、ツナ缶(607トン)の順に多く輸出されました。

2010年の輸出量比率は、サバ缶が10%であり、他の品目はいずれも5%を下回りました。

⑦2018年

2018年の合計輸出量は3,434トンでした。品目別には、サバ缶(2,256トン)、ツナ缶(532トン)、イワシ缶(104トン)の順に多く輸出されました。

2018年の輸出量比率は、サバ缶が5%であり、他の品目はいずれも5%を下回りました。

我が国の水産缶詰は、明治時代の産業形成期からその後長期にわたり、多くの需要を海外に求めて成長・発展してきました。輸出拡大が水産缶詰業の生命線であり、缶詰製造業者と商社との二人三脚により輸出を拡大してきました。しかし、1985年のプラザ合意以降の輸出価格の急激な上昇は、これまで缶詰輸出の第一線に立ってきた商社の国産輸出缶詰取扱戦略の縮小につながっていきました。

今回は、「戦後の日本人における水産缶詰の嗜好の変化」について、ご紹介します。引き続き、よろしくお願いいたします。